整理番号	徳渇 1	袋井用水と楠藤吉左衛門							
災害種別	水害・淮	お水・地震・津波	土砂災害	渇水・利水					
場所		市鮎喰町2丁目	工切火百	4571/ July					
見所・	徳島市鮎喰町二丁目、「上鮎喰」バス停のすぐ東側に流れているのが袋井用水です。								
アクセス	そこには、 ・	TO GENERAL STATE OF THE STATE O	:用水水源地を示す案内板と 東海 袋井用水水源地の現地を指 東海 袋井用水水源地の現地を指 東 路 後寿用水水源地 田 路						
	写真 5	課国分表語  ・	写真 7	#@五年の刻字が読み取れる 2015/8/11 3 写真 8					
解説文	写真 5 写真 6 写真 7 写真 8								
得られる 教訓		袋井用水水源地は、農民のため であり、水源、水の大切さを教		・ 闘した楠藤吉左衛門の功績を後世					
教訓分類	被害防止		・復興 自助 共助	公助 ハード ソフト					
時代	江戸時代以前	<b>江戸時代</b> 明治	・大正 昭和30年代まで	昭和60年代まで 平成以降					

整理番号	徳渇2	麻名用水と井内恭太郎						
災害種別	水害• 沿	対 地震・津	t波	上砂災害	渇水・利水			
場所	徳島県吉野川市川島町川島							
見所・ アクセス	吉野川市川島町の川島の城山の南に吉野川に麻名用水取水口があります。そこにある麻名用水碑には、 徳島県屈指の大農業用水「麻名用水」の完成に尽力した井内恭太郎などが取り組んだ大事業の内容が刻ま れています。							
写真・図		第4回編集 (1/9年 を - / 20/9 年) 明明を担い、20/3 (20/3 (3) 5) 月 明明を担い、20/3 (20/3 (3) 5) 月 日本の場所 (1/2 1/2 (5) 5) 月 日本の場所 (1/2 1/2 (5) 5) 月 日本の場所 (1/2 1/2 (5) 5) 月 日本の場合 (1/2 1/2 (5) 5) 日本の 日本の場合 (1/2 1/2 (5) 5) 日本の 明末3年 (1/2 1/2 (5) 5) 日本の 日本の場合 (1/2 1/2 (5) 5) 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の	<b>水取水口</b>	等名用水间等地位间	写真 4			
解説文	写真5 写真6 徳島県屈指の大農業用水「麻名用水」(写真1) が完成したのが明治45年であり、着工が明治39年であるから、実に足かせ7年にも及ぶ大事業(写真2)でありました。吉野川の右岸(南岸)の鴨島町から石井町にまたがって、南北二つの幹線と多くの支線水路が設けられ、1,250町歩あまり(大正3年調べ)の水田を灌漑(写真3の図)できるようになったのです。阿波藍が明治30年代に約15,000haをピーク(写真4の阿波藍の作付推移のとおり)、ドイツから安価な化学染料が大量に輸入されるようになると、たちまち阿波藍の市場を奪いとり衰退し、その後は、藍作から稲作への転換のため、堤防や用水路の整備が強く求められることとなりました。吉野川の明治40年からの第一期改修や麻名用水がそうです。幕末から明治にかけて、吉野川の利水を提唱した人に、後藤庄助、庄野太郎、豊岡茘墩らがいます。彼らは吉野川流域に大規模な用水路を開削することにより藍作から米作への転換をはかり、農業経営を安定したものにしたいと願っていましたが、彼らの壮大な構想は容易に実現には至りませんでした。井内恭太郎(写真5)は、明治30年、麻植郡長として赴任し、麻名用水の構想を発案し、井内らは再三にわたり用水案の実現を説いてまわったが、農民は聞く耳をもたなかった。この時の様子が麻名用水碑(写真6)に刻まれています。明治37年にこの地域一帯が大干ばつに襲われ、これがきっかけとなって、明治38年には「紀念麻名普通水利組合」が結成され、管理者に井内恭太郎が就任し工事を完成させました。のち美馬、名西郡長となり、板名用水(明治45年)建設にも努力しましました。							
得られる教訓	麻名用水碑に「一身を犠牲として隠忍自重(いんにんじちょう)ついに今日あることを至(いたら)せり、」と記されているように、計画に反対する住民と粘り強く対応した強力な指導者により社会資本整備が進んだことを教えています。							
教訓分類 時代	被害防止 江戸時代以前	準備 災害対応 江戸時代	復旧・復興 明治・大正	自助共助昭和 30 年代まで	公助     ハード     ソフト       昭和 60 年代まで     平成以降			

整理番号	徳渇3	雨乞い行事の八幡神社							
災害種別	水害・浩	お水 地震・津波 土砂災害 <b>渇水・利水</b>							
場所	徳島県三好市池田町白地本名								
見所・ アクセス	三好市池田町白地には、雨乞い行事を行う八幡神社があります。国道 33 号の池田ダムの湖水に架かる橋を渡り、そのまま直進し国道 192 号入り約 200m 行ったところに左から合流する道路に進み、約 150m のところの信号のある交差点の山側道路を上がった所にあります。								
写真・図		<b>再左</b> い行事が行われた白地の八幡神社 日地の八幡神社 写真 1 写真 2 写真 3							
解説文	写真 1 写真 2 写真 3  三好市池田町白地には、雨乞い行事行う八幡神社(写真 1)があります。 明治から大正にかけて、三好市では夏がくると毎年のように干ばつが続き、三年に一回ぐらいは、とうもろこし・たかきび・あわ・こきび等が畑で黄色くなり、日は亀の甲 かんかいようすいのようにひび割れて、大きな被害を受けていました。この頃は、濯湖周水として、馬路 川や馬谷川から水をとっていましたが、夏になると水量が少なくなり、高台などでは、飲料水の井戸や湧水も枯れてしまい、手のほどこしょうがありませんでした。このため、農民は雨乞いをして、八幡神社(写真 2)に雨降りの祈願をしていたと言います。 四国防災八十八話第 10 話には、「昔、三好市、阿波市などでは、吉野川沿いにありながらも、田畑が河岸段丘の上にあるために、平地の底を流れる吉野川の豊かな水を利用することができませんでした。このため、ひでりが続くと、干ばつに苦しめられてきました。資金や技術が十分ではない時代に、人々ができることは神様にお願いすることでした。旧池田町では農民が八幡神社に集まって、雨乞いの祈とうや踊りをしました。」とあります。 地元では「月夜にびばりが足を焼く」。吉野川の河岸段丘(写真 3) のように池田グムの湖水を望めるような高い土地)は、ひでりが続くと、夜、木々の枝にとまったひばりが足を焼くほどに地表が熱く熱せられて水不足になったといいます。								
得られる 教訓	地域の雨乞	い行事から学び、普段から渇水対策を考えておくことです。							
教訓分類	被害防止	準備 災害対応 復旧・復興 自助 共助 公助 ハード ソフト							
時代	江戸時代以前	江戸時代 明治・大正 昭和30年代まで 昭和60年代まで 平成以降							

整理番号	徳渇4	「一の堰」をめぐる上下流の争い						
災害種別	水害・治	治水 地震・津波 土砂災害 <b>渇水・利水</b>						
場所	徳島県阿南市富岡町車ノ口							
見所・ アクセス	徳島県阿南市富岡町には、昭和 10 年に水争いから起こった一の関紛争から桑野川に整備された一の堰 (写真1)があります。 一の堰は、元国道 55 線(現在県道 130 号)を南に向かい県立富岡西高等学校の 横の桑野川に架かる橋の下流約 100m 付近にあります。							
写真・図	现在の「-の#』(第3代 写真 1	写真 2	DE INCORPO	DO - DOS SERVICION DE SERVICION DE SERVIC	いで対立した地域の図 一の親と利用者	写真 5		
	<b>■ 野東川と風野川・「一の道」の</b> ■ 1007 - ○	(1)	3-20/22-504 THE STATE OF THE S	- 2 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	真 9	写真 10		
解説文	写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10 一の堰は、江戸時代に 1638 (寛永 15) 年に桑野川につくられた石造りの堰でした。初代の一の堰は幕府の一国一城の命により富岡城を取り壊した際に、今の富岡西高校の西 (写真 2)、『一の堰』の位置の変遷 図 (写真 3) に城の石垣の巨石で築かれた洪水で微動だにせぬ堰だった云われています。この堰のおかげで下流の水田に水を引き入れることができるようになりました。その反面、堰上流の地域では、大雨の度ごとに浸水被害が頻発しました (写真 4 の図参考)。 『那賀川の水書と一の関紛争問題』藤川勝雄(徳島地方史研究会『史窓』第 42 号)によると、この堰は富岡・見能林地域(島脇という)へ用水する目的で賀島主水(富岡城の城代で蜂須賀家の家老)の鶴の一声「あれへ堰をせくが一同どうじゃ承知致せ」で造られた御影石造りの万年堰であったされています。以来、この堰が原因で上流の長生・宝田地域(竹原という)は毎年数回に亘り大被害を業るようになり、毎年大水毎に関を落とせ、いや切らぬの争いは利害が相反する上流(長生・宝田)と下流(富岡・見能林)との争い(図(写真 5)は毎年絶えない状況になっていました。そのような中、昭和 10 年 8 月の中頃宝田、長生の地区民大雨の最中大拳して、このの関に押しかけ頑強を誇る堰堰を根底から破壊するという大事件が起こりました。ちょうど水稲の穂ばらみ期で大被害を恐れた農民の不満と要求が爆発したもので、警察問題となりました。この利害相反す上流と下流の紛争は容易に解決で不満と要求が爆発したもので、警察問題となりました。この利害相反す上流と下流の紛争は容易に解決でできませんでした。この関り大争動により宝田・長生地域は、那賀川(写真 6) から引き入れた大小用水粉の末端を全部密閉して余水を絶対に桑野川へは落とさない用水統制を考えました。この用水統制が上流でもちあがったことに富岡見能林地域は驚き、また言い争いになりました。この日本統制が上流でもちあがったことに富岡見能林地域は驚き、また言い争いになりました。で写真 3) の場所に 1953 (昭和 28) 年にの堰 (第 2 代)を改築しました。堰横の石岸堤防には、3 の石碑(写真 7) があります。最も手前の「一ノ堰記念碑」(昭和 28 年 11 月建立) 石碑 (写真 8) には、「地球の刊と百五十米ノ上流ニアリ・」という刻字が読み取ることができます。その隣の「一ノ堰復旧工事堤防改修工事」(昭和 13 年 3 月建立) により場防がなかった桑野川の修工事(那賀川・桑野川の主な国による改修事業(写真 10))により堤防がつくられ 1960 (昭和 35) 年に完成しました。更にまた那賀川の用水を統一して従来の不完全な堰を一ケ処に統合して完全なものにするいわゆる那賀川南岸用水事業が昭和 17 年着工され同22 年完成しました。第 3 代目となる現在の一の堰(写真 1)は 1968 (昭和 43) 年に完成し、桑野川下流南岸の阿南市富岡町、見能林町、及び7 見町に灌漑用水を供給しています。							
得られる 教訓		とめぐって深刻な上 会資本を整備してい			地域の風土、社会を良 れています。	く理解して、		
教訓分類	被害防止	準備 災害対応		自助 共助	公助 ハード	ソフト		
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代以前	昭和60年代以前	平成以降		

整理番号	徳渇 5	三ツ合堰を巡る水争い						
災害種別	水害・治力	治水 地震・津波 土砂災害 渇水・利水						
場所	徳島県板野郡北島町高房							
見所・ アクセス	北島町役場の前の県道 14 号松茂吉野線の高房で今切川に架かる橋を渡ります。その北側の旧吉野川と 今切川の分流地点の川の中に、水面より少し出た捨て石が見えます。これが三ツ合堰跡です。							
写真・図	写真 1 ************************************	写真 2    State	写真 3	写真 4 写真 5				
解説文	写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10 現在の旧吉野川は、第十堰付近(上板町佐藤塚)で吉野川本流から東北に分かれ、さらに北島町高房で今切川を分流します、この分流地点にあったのが三ツ合堰、(写真 1、2) です。現在は写真のように水面より少し出た捨て石が見えるのが三ツ合堰がです。これら二つの川は下流の北部を大きく乾行しながら、吉野川とともに、河口域に広大なデルタ地帯を形成しています。吉野川では、沿岸の耕地が比較的高く、吉野川の水を直接取水することが難しかったことに加えて、洪水氾濫が稲作を許さず、藍作が盛んで、稲作は藍作に劣る立場で展開されていました。このため、藩政期に吉野川の水を農業用水として必要としていたのは、主に旧吉野川の河口城で開発された新田地域(写真 3) でした。当時、第十堰から取り入れた水は、新田開発地域の命の水でした。その貴重な水は吉野川(旧吉野川)を下り、途中、北島村で今切川を分派して河口に注いでおり、吉野川(旧吉野川)筋の水は松茂村、北島村、大津村及び堀江村の4 村が、今切川筋の川内村、応神村の2 村が農業用水として利用していました。吉野川(現旧吉野川)と今切川への水量は、古くから北島村高房(写真 4) に「三ツ合堰」があって、吉野川(現旧吉野川)で今切川への水量は、古くから北島村高房(写真 6) に「三ツ合堰」があって、吉野川(現旧吉野川)で、今切川3の割合で分けていた農業用水の要でした「写真 5)。しかし、洪水により堰が傷むと地盤が低い今切川への流れる水量が多くなり、日照りが続くと両川の農民は堰の監視に目を光らせて、流血の水争いがいしばしば行われていました。その中で昭和5年のニツ全地をめぐる水争いが有名です。0urよしのがわ2019 立冬号 Vol. 33 で紹介されている記事などを参考に以下に紹介します。大約争が起った昭和5年は、小雨で全国的な干ばつで吉野川も水量が水ないことに加えて、第十樋門取れ口土砂堆積の影響もあり流下水量が不足していました。その中で紹和5年の三少年に限のよっ高さには決まりがあり、当時、県から許可されていた堰の施設規模は、東から約7m以内、高さは干剤面までに限る。舟後の進行は屈曲させてはならないというものでした。一切川の大きない地の入達は、東地では見る。高さには決まりがあり、当時、県から許可されていた堰の施設規模は、東から約7m以内、高さは干剤面までに限る。舟後の進行は屈曲させてはならないというものでした。しかし水量が少なくなると今切川へ多くが流れるため、青野川筋4村の入達は、乗りを着つたのでした。「中で動」が積に関し、川内村長、応神村長は、知事・土木課長など実地視察の結果、堰を原形通りに撤去するより、声が観到しており、大きく教刊しています。場前のおまではいて現在も、人口減少が続く徳島県下において唯一人口が増加しており、大きく発展しています農業用水のみなおも、人口減かが続く徳島県下において唯一人口が増加しており、大きく発展しています農業用水のみなお、人口減かが続く徳島県下において唯一人口減増加しており、大きく発展しています農業用水のみなな							
得られる 教訓	三ツ合堰をめぐる水争いは、旧吉野川と今切川の水が利用できない場合の厳しい状況を表しています。 水争いをきっかけに造られた現在の旧吉野川と今切川の河口堰が今日の水利用に大きな役割を果たして いることを教えてくれています。							
教訓分類	被害防止	準備 災害対応 復旧	・復興自助共	<b>助</b> 公助 <b>ハード</b> ソフト				
時代	江戸時代以前	江戸時代 明治	・大正 昭和 30 年代ま	で 昭和60年代まで 平成以降				

整理番号	徳渇6	那賀川の水利の歴史を伝承する堰・用水碑(阿南市)							
災害種別	水害・消	台水 地震・津波 土砂災害			渇水・利水				
場所	徳島県阿南市羽ノ浦町中庄ハタイ 34-6								
見所・ アクセス	小松島から羽ノ浦に向かって県道 130 号を走行して、JR 牟岐線の高架を越えて約 400m 先の交差点を左折し北に約 230m進んだ三叉路を左折し JR 踏切りを渡り、すぐに右折し水路沿いの道路を 500m 行った羽ノ浦町中庄、那東地区の道路沿いに水路開鑿義人「佐藤良左衛門翁碑」(写真1)があります。								
写真・図	写真		写真 2	RUIL A SE POLIT	真 3	写真 4	写真 5  「現本的大学等の合金の報子を表現りの音を表現した。 対している はいっと はいっと はいっと はいっと はいっと はいっと はいっと はいっと		
	45	Total Medical State of State o			- OF THE STATE OF	A SAN TO CALLED AND A SAN			
			写真 7			写真 9	写真 10		
解説文	写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10  2022 年9月の現地調査で阿南市には、那賀川の堰や用水の歴史を伝承した石碑が写真 2 にように多く残っていることが確認できました。その中で水路開鑿養人として知られる佐藤良左衛門(りょうざえもん)の顕彰碑が佐藤家の屋敷があったとされる那東地区の道路沿いに昭和15年に建立されています。碑には「羽ノ浦町中庄は、昔から水利乏しく米作ももつとも不便なところで、中庄宇那東の義人、佐藤良左衛門は、これをなげき苦心さんたん身命をかけて自ら工を起し、明和九年(1792)九月 廣瀬用水路延長粉三十町(3300m)を開削して、それらからは旱害を知らず、先人が残してくれた恩恵は今日に至る」などと記されています。また佐藤良左衛門は、那賀川北岸の代表的な利水施設として、延宝 2 年(1674 年)に羽ノ浦町岩脇地先に大井手堰を築いています。その大井手堰跡碑(昭和30 年建立)(写真3)があり、碑には「大井手用水は阿南 の穀倉たる那賀川北岸 立江、坂野、今津、別浦、平島地区の稲田一千三百町歩に灌漑する大動脈にして、之が潤渇は関係二千数百農家の死活に関する重要用水なり・中略・大井手用水は阿南 の穀倉をあ那賀川北岸 立江、皮野、今津、別浦、平島地区の稲田一千三百町歩に灌漑する大動脈にして、之が潤渇は関係二千数百農家の死活に関する重要用水なり・中略・大井手用水は阿南 の教倉をあ那倒水北岸 立江、梅野、今津、河浦、平島地区の稲田一千三町歩に灌漑する大動脈にして、之が潤渇は関係二千数百農家の死活に関する重要用水なり・中略・大井手用水は阿南 一の土木技術者といわれた原士の伊沢亀三郎の親子が関わっていたことも、那賀川平野の米の生産量が阿波全体の三分の一を占めるまでになったことと関係していると思います。 南岸には乙堰百年記念碑(写真 4)が阿南市立横見小学校近くの道路沿いに平成元年建立されています。の本占めまでになったことや開治29年那賀奥の高磯山の大崩壊で人畜家屋耕地に大きな被害を受けた」が定との当時の苦労が伝承されています。この他にも那賀川には堰・用水岬は8隻(1836 年)」、「下広瀬堰(1790 年)」、「大井手堰(1674 年)」の取水施設を結合し、北岸堰を羽ノ浦町古毛に昭和30 年に造り、北岸用水の歴史・縁起を那賀川南岸用水の歴史・縁起を那賀川南岸用水碑に伝承しています。こ一方、南岸は、「一の堰(1603 年)」、「竹原堰(1674 年)」、「乙堰(1866 年)」を統合・昭和29年(1954 年) に市曜を沿って南岸用水の歴史・縁起を那賀川南岸用水碑 に伝承でしてがます。まの地に造り、水路で開上の下地では「水車」が使われていたため、平野の稲作は、那賀川の環境を羽ノ浦町古毛に昭和30 年に造り、北岸内の単り、「大井手堰(1674 年)」、「京堰(1954 年)」、「京堰(1866 年)」、「竹原堰(1866 年)」、「大田・田・町道を通していままり、こちに、こちの歌賀川の扇状などので取りに、「東京り」、「大田・田・大田・田・大田・田・田・大田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田								
得られる 教訓	よって、時に	は尊い命や貴重	重な財産を犠牲に	して、積る	4重ねられたも	のです。今日、	先人の昔からの努力に 渇水のリスクは高まっ を教えてくれています。		
教訓分類	被害防止	準備	災害対応 復旧	日・復興	自助 共助	2 公助	ハード ソフト		
時代	江戸時代以前	江戸 町	<b></b>	・大正	昭和30年代まで	昭和 60 年代	まで 平成以降		